

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 館長時代の思いで  |
| Author(s)   | 西原, 宏   |
| Citation    | 静脩 (1999), 臨時増刊号(1999)100周年記念: 5-5  |
| Issue Date  | 1999-11   |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/2433/37837">http://hdl.handle.net/2433/37837</a> |
| Right       |   |
| Type        | Article   |
| Textversion | publisher   |

## 館長時代の思いで

西原 宏

私が附属図書館長を務めたのは定年直前の昭和59年4月1日から61年3月31日までの2年間である。図書館学の実践の場という伝統的な図書館から、長尾真館長が御自身で開拓されその実現に先駆的な試みをされたところの電子図書館へ移行する過渡的な時代に当たって、全く思いも掛けずに附属図書館長に就任することになった。

私の前々任者である林良平先生は9年間にわたる異例に長い館長御在任中に附属図書館の近代化へ向けての布石と準備を周到綿密に計画され着々と実現して行かれ、新図書館の竣工する1年前に高村仁一先生と交代された。高村館長は新図書館への再移転と図書館財政の強化に尽力された。私は偉大な両館長の跡を継いで、附属図書館にとってまことに重要なこの時期に、一体、自分は何をしたらよいかを考えずには居られなかった。

定年退職まであと2年という年であったので、新しいことを考え出すより、諸先輩が既に提言された事業のなかから、やり甲斐があり実現の可能性があるにも関わらず未着手のままになっているものを発掘しようと考えた。そう考えて『静情』及び『学報』のバックナンバーを調べたところ、そこは思った通り宝の山であった。

そのなかで私が特に注目したのは、林良平館長が丹羽義次大型計算機センター長と共同で作成された京都大学学術情報ネットワーク建設の提案であった。この提案は総長の諮問に対する答申として京都大学学報に掲載されたが、実現の手続きをとらないままになっていたのである。大学学術情報センターが置かれ、全国の大学を結ぶ情報幹線を文部省が建設に当たるのに呼応して、学内の学術情報ネットワークはそれぞれの大学に委ねられる状況の中で、この答申はまことに時宜を得たもので、その実現に向けた努力を始めるべき時に当たっていた。

附属図書館内で意見を聞いたところ、進行中の図書館の電算化との連携を念頭に、世話部局として実施の具体的計画の作成に協力しようということであったので、図書館商議会に諮り承認を得た。このための全学の委員会が設置されたので丹羽大型計算機センター長と協力して計画案作成の作業に着手した。ネットワークの具体案の作成は堂下修司教授にゆだねることとした。堂下教授は当時データ通信の技術が飛躍的に進歩する時期に当たっていたことに鑑み最新の設計とすること及び本学の多数のキャンパスが同等の条件で利用できることを2本の柱として優れた設計を提示された。委員会は直ちにこの設計を骨子とする建議書を沢田総長に提出した。沢田総長はその重要性を直ちに目撃され、本学の事業計画として取り上げられたのである。このことは忘れがたい思い出である。このネットワークは私の定年退職後、大型計算機センターに置かれた西島総長以下の建設本部の方々による強力な体制でKUINSとして実現した。本学に学び、研究教育に携わる人々にとっては、またとない贈り物となった。

附属図書館には事業の規模に対して人員も予算も十分でなく、図書館業務の電算化の新しい仕事が増え、また各部局の図書室との関係もあり、それぞれ事務部長を始め各課長には随分苦労をかけたが、私にとっては在任中は幸い比較的穏やかに日が過ぎた。当時の図書館員・関係者の方々に限りない感謝の念を覚える。

当時、4階の館長室からは生駒山がよく見えた。秋の夕方の空を夥しい数の鳥が南に向かって渡っていくのが見えた。やがて2年の任期が過ぎて3月31日となり、二階堂総務課長と共に学内の各部局への挨拶回りを終え、図書館前で課長と別れ、昭和17年9月に入学以来40年余り通った京都大学の本部キャンパスを、あとを振り返らずに立ち去った。

(にしはら ひろし：元附属図書館長)